

東日本大震災とアフリカで出会った、奥深い男たち、女たち……

若杉なおみ

わかすぎ なおみ / 筑波大学大学院

震災被災地で医療支援をしながら、ずっとアフリカを思い出していた。「生」の感情や「心のうごき」がひしひしと伝わってきたのだ。それは、アフリカでなされた「人間っぽい」人たちとの濃い情感の交流につながる。彼の地の女性たちは、一様に強く、明るい。そして、なんと奥深いことか。

東北の被災地でアフリカを思った

この原稿を書こうとしていた矢先、2011年3月11日に東日本大震災と巨大津波が発生した。2万人近い犠牲者の数、言語に絶する被害の甚大さ、そして引き続き起きた福島第一原発事故、この日は日本の3.11として長く人々

の記憶に留められるに違いない。私は地震の数日後に被災地仙台に入り、戦場のような石巻赤十字病院と避難所での医療支援をさせていただいた。身近な人々の大量の死を目撃し、生き残り、今日生き抜くことに全生命力をかけるなければならない、衣食住を確保すること自体の困難、これでもかと言うように襲ってくるひどい寒さや病気……。このようなものに接して、私は何故かずっとアフリカを思い出していた。何か共通点があるからなのだろう。

私は小児科医となってから免疫学やエイズの研究をする為1982年から92年までの間の8年間をパリに子連れ留学をしていた。パリにはアフリカからの移民も多く、アフリカの飢饉や内戦のニュースなどは日本にいる時よりも頻繁にリアルに伝わっていたのでアフリカを身近に感じていた。そうは言っても私は研究に

忙しくアフリカがかかえる問題も横目にとらえる程度だったが、帰国後、開発途上国への国際保健医療協力の世界に飛びこみ、再びアフリカと出会うことになった。実際に行きつて見たアフリカの風景や人々は、ヨーロッパ人のフィルターを通して私が見ていたアフリカとはかなり異なったものだった。アフリカはまだ眠っている、アフリカには歴史がない、明日のことを考えない人々などというアフリカ評の多くは、支配しようとするものが支配されるものに対して持つ（持とうとする）いわれなき蔑視に基づいているのではないだろうか。日本人もかつてはイギリス人に「怠けもの、正直でない」と言われていたということだから。

日本では人の死に日常的には出会わなくなったと言われているが、アフリカでは今でも貧困やエイズを中心とした疾病が蔓延し、人間が簡単に、本当に簡単に死んでいる。そのような生命へのリスクと背中合わせに生きているからこそ、人々が必死に精一杯いのちを生きる姿が際だっている。困難の中でもっこり笑えて、他人の苦しみも思い測ることができる能力が人々の中に強く育っている。

男らしさ、女らしさ

最近の平常時の日本では、何かロボットのような人間が増えたと言う人が多いが、東北の被災地では、人間の「生」の感情やゴゴゴと音を立てているかのような「心のうごき」がひしひしと伝わってきた。テレビの映像でも何度か目にした、悔しく、打ちのめされまいと思っはいるがあまりの重圧に「男泣き」してしまう壮年の男性たち、遠くの一点を見つめ哲学的な顔になる年配の女性たち。このような「人間っぽい」人たちとの濃い情感の交流は、よくアフリカで私はしていたではないか、と思出したのだ。

男泣きする男性を見て、私は不思議にも「男らしさ」を感じたのだが、アフリカでも、これが本当の「男らしさ」「女らしさ」というものではないか、と何度か感じた場面がある。いわゆる「らしさ」批判は、私たちの頭に植えつけられたジェンダー概念から生まれる、記号としての「らしさ」を内省批判するために言われるが、生物学的な「その性らしさ」、性の違いの面白さは、言語的社会的に押しつけられた、ジェンダー的な「らしさ」とはしばしば



写真1 「魚のぶつ切りと布、どっちも売っています。」(コートジボワール)。



写真2 木陰でひと休み(コートジボワール)。



写真3 野外美容院にて(コートジボワール)。



一致しない。が、むしろかなり別個のものとして確かに存在する。

人類の故郷アフリカで出会った、たくましい女性たち

日本にとって「アフリカは遠い」とよく言われるが、私たち人類の故郷はアフリカである。人間の細胞にあるミトコンドリアは母由来でしか受け継がれず、母、その母、そのまた母をずっと追っていくとたったひとりの女性、15万年前にアフリカで生きたイヴにたどりつく。そしてイヴの7人の娘たちがアフリカを離れ、他の大陸へと旅を続け、私たちが生まれてきたということになっている（ブライアン・サイクス『イヴの七人の娘たち』参照）。そのアフリカの、素顔の女性たちはどんなのかと言えば、やはりあれほどリスクと困難に満ちた生活の中で彼女たちが示す「明るさ」「たくましさ」が際立っている。「何をいったい怖がっているの?」「くよくよしていても仕方ないよ!」とアフリカの女性たちに言われているような気が私はする。

ザンビアの首都ルサカで或る日、ミニスカートをはいた女性がバスに乗ってきた所を、バスの運転手が「そんなに人に裸を見せたいか」と言いながら乗客のいる前で服を脱がせる、という事件が起きた。さあ、ザンビアの女たちはどうしただろうか。まもなくこれに抗議をする女性たちがYWCA（キリスト教女子青年会）に集結し氣勢を挙げたということである。これが日本だったら、同じような断固とした態度を行動で示す女性たちがどれ位いるだろうか、はなはだ心もとない。さらに驚いたのは、この集会に当時の運輸大臣（かつて保健大臣）のルオ女史がわざと黒いミニスカートで現われ、「男性たちこそ欲望を野放しにせず抑制することを知るべきである!」と演説したという話である。このルオ女史は、そばにいと吹き飛ばされそうになるようなエネルギーを発していて、「アフリカが貧しいなんて誰が言ったの! (Who said Africa is poor!)」といったようなせりふでアフリカ人の心を揺さぶる演説をする女性である。

私の見聞では、男性と同等の教育を受け、男性に伍して社会で活躍する女性のエリートは、しばしば「男性の頭脳」を持つようになる。日本のある著名な女性弁護士が私に言ったこ

とがある。「私は弁護士になる時に男の弁護士の頭を持つように育てられたと思う、それを自ら否定していく過程が必要だった。」と。私も「男の医者頭」を作られ、あらためて女の視点を持ち直す必要があったのだ、とその時同感したものである。であるからこそルオ女史のようなエリート中のエリートのアフリカ女性が示した、確かな女性の視点と行動に瞠目した。

このような明るいたくましさはエリート女性だけの話ではない。診療所で、村で、市場で、出会って話したアフリカの女性たちは一様に強く、明るい、わが姉貴たちである（写真1~5）。また彼女たちが身につける色の豊かさ、奔放さにも注目して欲しい。彼女たちの心の躍動が伝わってくるかのようだ。しかしこの明るい写真の何枚かはHIV感染女性のものである。

一方、彼女たちがふっと見せる、「思慮深さ」

がにじむ哲学的な顔にも気がつく時がある。ルオ女史が議論中に見せた顔（写真6）、コートジボワールでエイズ患者さんへの巡回自宅訪問を現地のNGOと共にしたときに出会った、あるエイズ患者のお母さんの何か達観した表情（写真7）、マダガスカル市場で子どもを抱く母（写真8）、また私が撮った写真ではないが、国際エイズ学会で入手して以降、ずっとオフィスに張っているポスターのギデオ・メンデル氏撮影の写真に見る、エイズの息子を抱くお母さん（タンザニア）の顔と佇まい（http://actionaidusa.org/what/hiv_aids/gallery/を参照されたい）。このような女性たちに出会った時、はっとするような、恐れ入りました、と言いたくなるようなものを感じるのは私だけではないだろう。なんとも奥深い、アフリカの女性たち!



写真8 何を想うか、マダガスカル市場で子どもを抱く母。



写真4 「これで出産予定日わかります。」（ザンビア母子診療所で）。



写真5 赤ちゃんたち、勢ぞろい。「子どもだけでもいいから日本に連れて行って。」と言われた（コートジボワール）。



写真6 元保健大臣のルオ女史が、ザンビアのエイズ対策を議論中に見せた顔（ザンビア）。



写真7 あるエイズ患者のお母さんの、何か達観した表情。このあと巡回自宅訪問した筆者にバイナップルをくれた（コートジボワール）。